

<センター通信 6月号>



地域総合医療センター 伴 信太郎

『带状疱疹の話』



带状疱疹ってどんな病気？

‘水ぼうそう’という子供がかかる病気の名前を聞いたことがある人は多いと思います。予防接種が普及してきたので、最近はこの病気にかかる子供は減ってきました。これはウイルスが原因の病気なのですが、治ってもこのウイルスは体からいなくなるのではなく、体内に潜んでいて、その人の体力が低下したり、ストレスで免疫力が低下したりすると再び活動を始めます。その時には、‘水ぼうそう’ではなく**带状疱疹**（たいじょうほうしん）という病気が出てきます。「昔の名前で出ています」ではなく、かなり姿を変えて出てくるのです。

それではどのように姿を変えて出てくるのでしょうか？それは神経の分布に沿った「ぶつぶつ」（医学的には発疹と呼びます）として出てきます。神経の分布は帯状ですので、これがこの病気の名前の由来です。

皮膚の「ぶつぶつ」として出てくる前には、その神経の分布領域の神経痛としてまず感じます。神経痛というのは「時々ビビッという感じで感じる痛み」で、途切れることなく続く痛みではありません。「時々ビビッ、・・・ビビッ、・・・ビビッ」と感じる痛みです。それから数日して（大抵は1週間以内）「ぶつぶつ」が出てきます。

「ぶつぶつ」の出かたの特徴は、体の片方に出て、反対側にまで広がらないのが特徴です。手足に出る場合はこのような特徴がわかりませんが、顔や体の場合は極めて特徴的な分布です。体の真ん中で「ぶつぶつ」広がりストップしています。

これから増えそうな带状疱疹

予防接種のおかげで子供が‘水ぼうそう’にかかることが減ってきたことが、带状疱疹がこれから増えていきそうな大きな理由だと考えられています。大人になって‘水ぼうそう’のウイルスが体の中に潜んでいて暴れださないのは免疫という人間の体に備わっている機能が、ウイルスが暴れだすのを抑えている

からなのです。‘水ぼうそう’の子供に接すると、それまでウイルスのことを忘れかけていた免疫の働きが思い出されて、「‘水ぼうそう’ウイルス」に対する警戒感が高まって、帯状疱疹の発症が抑えられるのですが、その刺激（‘水ぼうそう’の子供に接すること）がなくなって、免疫の警戒感がすっかり弱まってしまって、帯状疱疹が発症すると考えられています。

帯状疱疹の治療

帯状疱疹にはウイルスに対する飲み薬や点滴のお薬があります。よほど重症な場合を除いては飲み薬で治療されます。ここで困るのが、治療のタイミングが遅れると皮膚の発疹が治った後に、神経痛が残ることがあることです。この神経痛が頑固で、この痛みに生涯悩まされる場合が出てきます。帯状疱疹は生涯で3人に1人が発症し、85歳以上の高齢者の半分以上が発症すると言われています。



帯状疱疹の予防

帯状疱疹の予防のためには、ワクチンがあり、成人の場合（今回は小児については触れません）50歳以上の人を対象になります。このワクチンには2種類（生ワクチンと不活化ワクチン）があり、それぞれ一長一短がありますので、詳しくは医療機関でご相談ください。ここでは、いずれかのワクチンを接種することをおすすめしておきます。

【まとめ-帯状疱疹とその予防-】

子供に‘水ぼうそう’を起こすウイルスが体の中に潜んで、特に高齢になって体が弱ってきたときに帯状疱疹という病気を引き起こします。85歳以上の高齢者の半分以上が発症すると言われています。この病気の厄介なところは、発疹が治った後の神経痛です。予防には50歳以上の人を対象にワクチンの接種が有効です。

